

特集

bring
happiness

ここが伝わるまちへ 内子のボランティアのカタチ——

人と人のつながりや、

地域の絆が失われつつある中で、

ボランティアへの注目が高まっています。

ボランティアは、特別な人が行う、特別なことではありません。

昔は当たり前にあった「お互いさま」の気持ちで、

互いを思い合うこころをカタチにしたもの。

みんなのこころがつながり合う、そんなまちづくりを目指して、

今、ボランティアを考えます。



「ちょっとボランティア」と言しながら、近所の交差点に立ち、交通安全の旗を広げる岡田クニエさん=中通り=。10年以上にわたり、毎朝、登校する子どもたちの安全を見守り続けています。

優しさや思いやりを力タチに

誰のために、社会のために、自らの意志で、進んで行うボランティア活動。それは相手だけでなく、自分自身も豊かにしてくれる力を持つています。

一人一人の優しさや思いやりのこころをカタチにして、みんなでもっと幸せになるために――



町社協から贈られるお餅を届ける民生児童委員の上堂恵子さんと、「ありがとうございます」と笑顔で受け取る有末行夫さん。民生児童委員は、地域の中でさまざまな相談・支援活動を行うボランティアです。

ボランティアとは？

ボランティアの語源は、「自由意志」を意味するラテン語の「VOLUNTAS」だといわれています。他者や社会のために自らの意志で活動する人のことです。

日本では、1970年代から、ボランティアが全国に普及。95年に発生した阪神・淡路大震災時の若者や学生ボランティアの活動により、一層関心が高まりました。現在は、全国で年間700万人余り、愛媛県内でもおよそ10万人がボランティア活動を行っています。

(21年度全国社協調べ)

なぜボランティアをするの

そもそもボランティア活動と仕事の違いは、金銭的

な利益を第一に求めないことにあります。それでもボランティア活動を行う理由は何でしょうか。人間は、優しさをもらつただけで、心が触れ合つただけで「感動する」生き物です。困っているから手を差し伸べたい。一人ではなく、誰かの役に立つたり、喜んでもらつたりすると、自分だけが「感動する」生き物です。ただし、心が触れ合つただけで「感動する」生き物です。困っているから手を差し伸べたい。一人ではなく、誰かの役に立つたり、喜んでもらつたりすると、自分だけが「感動する」生き物です。つまり、小さな気持ちになります。つまり、小さな親切は、人間の「本能」なのです。

続けることが大切

「やらずにいられないからやる」という気持ちです。そのためには、自分が心から好きなこと、自分の能力を生かすこと、大切な人や地域のために行うことなどが重要になってきます。ただししがちです。しかし決してそうではありません。

私はボランティアと、いうと、「特別な人がする、特別な活動」と考えたり、「自分には無理」と敬遠したりしがちです。しかし決してそうではありません。

「やらずにいられないからやる」という気持ちです。そのためには、自分が心から好きなこと、自分の能力を生かすこと、大切な人や地域のために行うことなどが重要になってきます。ただししがちです。しかし決してそうではありません。

私はボランティアと、いうと、「特別な人がする、特別な活動」と考えたり、「自分には無理」と敬遠したりしがちです。しかし決してそうではありません。

わたしたちもこんな活動をしています

町内でも、さまざまなボランティア活動が行われています。その一部を紹介します。

ふれあい・いきいきサロン



サロンは誰もが気軽に集い交流できる場所。民生児童委員、自治会役員などが中心となって、各地域で開催しています。

参加者の声

重松滋子さん(69) 立石
毎回、手細工をしたり、お話を聞いたり、いろいろなことを教えてもらえるので楽しいです。これからも、できるだけ参加したいと思います。



手話サークル「内の子」



社協の手話奉仕員養成講座修了生が中心となり平成元年に発足。手話教室などを通して手話を広める活動を行っています。

受講生の声

沖野文華さん(10) 内子5
小学生から高齢者までいろいろな人がいて、わいわい楽しいです。手話を覚えることがいっぱいです。変だけど、そこが面白いです。



みんなのおはなし会「タンタン」



子育てが一段落したママたちによる読み聞かせのボランティアサークル。第2、4火曜日に内子児童館で活動しています。

参加者の声

岡澤悦子さん(32)・拓叶くん(2)
内子17
さまざまなタイプの本を読んでもらえるので、世界が広がります。少人数なので落ち着いて参加できるのもいいですね。



もっとボランティアを知ろう！

「ボランティア講座」に参加しませんか

●第1回「ボランティア入門」

▷日時 2月9日(土)午後2~4時

▷内容 「ボランティアって何?」「どんなボランティアがあるの?」など、まずは、はじめの一歩を学びましょう。

●第2回「町外ボランティア団体発表会」

▷日時 2月23日(土)午後2~4時

▷内容 町外で活躍する3団体の活動を紹介

●第3回「災害ボランティア講習」

▷日時 3月9日(土)午後2~4時

▷内容 いざという時に大切なのは、住民同士の助け合い。段ボールを使った避難所生活の模擬体験などを通して、その時、どのような助けが必要かを考えます。

●場所 内子自治センター

●受講料 無料

●定員 30人(予定)

●主催 内子町社会福祉協議会

【申込・問い合わせ】

内子町ボランティアセンター

(内子分庁 内子町社会福祉協議会内)

☎ 0893(44)3820

fax 0893(44)6135

誰でも、気軽にできることを知ってほしい

愛媛県社会福祉協議会 葛木啓士さん

ボランティア活動の高まりの背景には、孤立死や虐待の増加などに象徴されるように、コミュニティーの希薄化の問題があります。同じ地域に暮らすみんなが、元気に、幸せに生きていけるように、一人一人が自分にできることをする、それがボランティア活動です。特別なことではなく、誰でも気軽にできるということを、まず知ってほしいと思います。



だから、行動する

ボランティア活動を始めるきっかけはさまざまです。そして始める以上に大切なのは、続けることです。
好きなことや得意なことなどを生かし、それぞれの思いを持って活動する皆さんに、お話を聞きました。

好きなことを
生かして
サッカーの楽しさを
子どもたちに伝えたい



五十崎スポーツ少年団
監督 智葉誠さん(32) 下宿間

智葉さんは4年前から、五十崎スポーツ少年団で小学生にサッカーを指導しています。練習は火・木・土曜日。日曜には試合が入ることが多く、仕事の合間を縫つての日程調整は大変なこともあります。でも、「子どもたちが少しずつ上手になっていく姿や、うれしそうな笑顔を見るだけで、

やつていてよかったです」と話します。

智葉さん自身は小学3年生の時からずっとサッカーを続け、高校卒業後は実業団チームに所属。しかし、当時はサッカーが好きといふ気持ちはありませんでした。実業団を辞めて自由にプレーするようになって初めて、サッカーを好きだと思えるようになったのだと言います。「だからこそ、子どもたちにはサッカーの楽しさを伝えたい。自分の経験を生かし、子どもたちが大人になった時に、やつていて良かったと思える活動をしていきたい」と、情熱を燃やしています。

自分に
できることが
あるなら

災害はいつ起きるか分からぬ
だから助けられる人が、助ける

こころが伝わるまちへ 内子のボランティアのカタチ――



愛媛RB
代表 芳我哲生さん(51) 内子20

バイクの機動力と、それを支援するネットワークを生かし、災害時の情報伝達や救急活動を行うボランティア組織「レスキュー・ポート・バイクネットワーク(以下、RB)」。阪神・淡路大震災の被災地でバイクが活躍したことから、活動が全国に広がり、多くの県で結成されました。

雑誌で記事を目にした芳我さんも、「好きなバイクで何かできるならやってみよう」と、99年に愛媛RBを設立。01年に発生した鳥取

西部地震、04年の新居浜豪雨災害など、中四国を中心

に活動しています。また東日本大震災でも、募金活動などの支援を行いました。

「来てくれてありがとうございます。もしも愛媛で何があった時は、必ず行くからな」と声を掛けてもらつたこともあつたという芳我さん。「災害はいつ、どこで起ころか分からない。だから助け合う。特別なことをしているわけではない。ただ、自分にできることをやつていきたくと思う」と話します。



1_2001年、高知県西部豪雨水害にも出動。家の片付けのために出された家財や、それを搬出するトラックで道がふさがれるため、バイクが活躍する 2_安全に活動するための研修も欠かさない。9月に行われた愛媛県防災訓練では、雨の中、救援物資などの運搬訓練を行った

「ギブアンドギブ」から
「ギブアンドテイク」へ

この人のために、このまちのために、ボランティア活動をしたい――。たくさん的人々がそんな気持ちになれるまちは、幸せなまちに違いありません。誰もが心を伝え合うことができる、小さな親切ができる、そんなまちをみんなで育てていきましょう。

近年、さまざまな領域や分野で、ボランティアの活動的な動きが始まっています。ボランティア活動は、誰かや社会のために、自発的に行う活動です。しかし、それが単なる労力の提供や一方的な奉仕になつては、活動の広がりや継続は見込めません。大切なのは、ボランティア活動をする人の優しさや思いやり、受ける人の喜びや感謝など、互いのこころがきちんと相手に伝わること。一方的な「ギブアンドギブ」ではなく、「ギブアンドテイク」の関係づくりを進めていくことが必要です。

この人のために、このまちのために、ボランティア活動をしたい――。たくさん的人々がそんな気持ちになれるまちは、幸せなまちに違いありません。誰もが心を伝え合うことができる、小さな親切ができる、そんなまちをみんなで育てていきましょう。

職業を
生かして
手話を通して
優しさの和を広げたい



手話通訳士
山下幸恵さん(53) 中野
(写真は「ありがとう」を表す手話)

プロの手話通訳士として働く傍ら、手話の普及や交流を目的としたボランティア活動にも取り組む山下さんは、手話サークル「内の子」に所属する他、自身が住む大瀬地区にも、新たに「大瀬手話の会」を設立。小学校などの指導も行います。山下さんは、専門家としてやるべきことと、ボランティアだからできることがあると言います。例えば、日常のおしゃべりや手伝いなどは、ボランティアだか

らできることです。ボランティアは優しい気持ちから生まれるもの。人に対して優しくなれる、手話はそのきっかけづくりの一つなのにあります。手話を広めることで、優しさの和が広がるように、願いを込めて活動しています。

「小さな親切」を日常に

ボランティアは、こころを伝える、人と人を結ぶ一つの方法。
共に生きる仲間として、互いに支え合える社会の実現を目指して――

この人のために、このまちのために、ボランティア活動をしたい――。たくさん的人々がそんな気持ちになれるまちは、幸せなまちに違いありません。誰もが心を伝え合うことができる、小さな親切ができる、そんなまちをみんなで育てていきましょう。